

## 保幼小連携の歌唱活動

児童の音取りと幼児期の歌唱活動との関係に着目して

Singing activities in cooperation with preschool and elementary school

Focusing on the relationship between children's sound capture and early childhood singing activities.

飯泉正人（つくば市立荃崎第一小学校）

Masato Iizumi (Kukizaki First Elementary School in Tsukuba City)

(要旨)

本研究は、歌唱活動における保幼小連携推進の足掛かりとなることを目的に行った。第2学年児童の歌唱の音高から「取れた音数」および「棒歌い頻度」の記録を取り、質問紙への児童の回答から就学前の「レパートリーの広さ」および「歌唱活動の量」を調査し、前者と後者との関係を検討した。その結果、「取れた音数」と「レパートリーの広さ」との関係性、「棒歌い頻度」と「レパートリーの広さ」との関係性はいずれも認められなかった。それに対し、「取れた音数」と「歌唱活動の量」との関係性、「棒歌い頻度」と「歌唱活動の量」との関係性はいずれも確認された。小長野(2006)の先行研究から、本研究の結果には、4歳後半に著しく発達すると考えられる音高再生能力が影響している可能性が示唆される。

(キーワード)

歌唱活動、児童、音高、音取り、保幼小連携

### 1.研究の背景

保幼小連携が重要視され、就学前教育施設や小学校でそれに向けた取り組みがなされている。平成22年には「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」が出され、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3つの法令が同時に改訂された。音楽科教育の視点からも、幼児期の遊びとしての「表現」を、小学校での「音楽科学習」に繋いでいけるよう保幼小連携を推し進める必要がある。それは、歌唱表現の活動も例外ではない。

飯泉(2022)は、「コロナ禍における歌唱活動の一考察～聴取と身体運動のみによる

『発声なし』歌唱活動と『発声あり』歌唱活動の実践報告～」(日本音楽教育学会第53回大会)の中で、コロナ禍におけるK小学校の歌唱活動で行った「発声なし習得」の成果を検証するため、同等の曲を「発声あり習得」したときの成果と比較を行った。この研究で

検証のデータとしたのは、同じ調である「K小学校校歌」と「海」(文部省唱歌)とを歌ったとき、共通する8音のうち音高を正しく歌えた音の数と、旋律の音高をほとんど掴めないうで歌う児童の特定であった。本研究は、児童が音高を正しく歌唱することには、就学前の歌唱活動のどのようなことが影響しているかに着目し、児童の就学前(コロナ禍前を含めて)の歌唱活動の状況を調査し、小学校の歌唱の記録と照合することとした。これにより、的確な音高で歌唱するために就学前に重要なことを明らかにし、歌唱活動における保幼小連携の足掛かりとすることを目指す。

### 2.研究の目的

児童の歌唱活動における音高と、就学前の歌唱活動の状況を照らし合わせることにより、児童が的確な音高で歌唱することに対して、就学前の歌唱活動のどのようなことが影響しているかを明らかにし、歌唱活動における保幼小連

携推進の足掛かりとする。

### 3.研究の方法

#### (1)児童の歌唱の音高の調査

本研究の、児童の歌唱の音高の調査については、「コロナ禍における歌唱活動の一考察～聴取と身体運動のみによる「発声なし」歌唱活動と「発声あり」歌唱活動の実践報告～」（日本音楽教育学会第53回大会）（飯泉，2022）のデータを活用する。

飯泉（2022）は、コロナ禍における、K小学校の2年生と3年生の歌唱活動の中で行った聴取と身体運動（ロパクを含む）とを組み合わせた「発声なし習得」と「発声あり習得」とでの成果の比較を行った。結果としては、「発声なし習得」が「発声あり習得」の成果を音高の正確さで上回ったことから、聴取と身体運動を組み合わせた「発声なし習得」は、曲の聴取により集中できることにより、習得した音高がより正確になる利点がある可能性があることがわかった。つまり、曲を聴きながらロパクすることは、音高を正しく歌唱するという点から有効である可能性があることがわかったのであるが、この研究のデータとしたのは、同じ調の2曲を歌ったときの、音高を正確に歌えた音の数（a）と、音高操作の音域が狭い児童の記録（b）であった。

#### ①「校歌」の音取りの記録

筆者の勤務する公立K小学校は、2022年度初め、コロナ禍により歌唱の発声ができない状況にあった。K小学校では、歌唱以外の学習活動の発声やあいさつの発声は推奨されていたため、音楽の授業のガイドラインを整備し、歌唱でも発声を伴った学習を行うことを提案した。それにより、後に歌唱の「発声あり習得」ができるようになったのであるが、4月の時点で、発声できないなりに歌唱活動を行うため、聴取、音読、身体運動を単独で

行ったり、組み合わせて行ったりしながら、曲の「発声なし習得」を行った。第2学年と第3学年児童は、「校歌」（楽譜1）が未習であったため「校歌」の音取りも「発声なし習得」で行った。

本論文では、身体運動とは体の一部を動かすこととする。唇を動かすこともこれに含み、発声せず、歌っているかのように口唇を動かすことを「ロパク」と呼ぶ。また、「音取り」とは、旋律を構成する個々の音について音高を正しくつかみ歌うこととする。

発声できない期間は4月から5月であったので、その期間の授業（8回）の導入で、「校歌」について、歌詞の音読、聴取とロパク、聴取とロパクとリズム打ち（歌の旋律のリズムを手でたたく）の3つの活動を行った。

調査時期 2022年5月下旬

対象児 つくば市K小学校第2学年児童77名

調査曲 K小学校校歌

拍子 4分の4拍子

調子 へ長調

音域 C4～C5

#### K 小学校校歌

楽譜1 K小学校校歌

筆者は、「発声なし習得」の成果を確認するため、5月末の時点で、「校歌」の歌唱の状態を個別に音声記録として残した。録音したのは、主旋律音が含まれているピアノ伴奏に合わせて一人で歌ったものである。録音は一人ずつ別室に移動して行い、一番のみで行った。この音声記録から、次の2種類の記録を取った。

#### a 取れた音数

曲を構成する8つの音（へ長調、C4～C5）について、1回以上取れている（音高を正しく歌えている）音の数を記録した。

#### b 棒歌いの児童

今後の歌唱指導に活かすため、音高操作音域が狭い児童について記録した。これは、音高操作音域が5度を超えられず、旋律の音高をおおまかにも取れていない状態である。本論では、この状態を、棒読みならぬ「棒歌い」と呼ぶこととする。

### ②「海」の音取りの記録

コロナ禍における歌唱活動のガイドラインを整備し、2022年度6月より授業での「発声あり習得」が可能となった。そこで、前述の「発声なし習得」での音取りの成果を検証するため、「発声あり習得」で音取りした曲の歌唱の記録を取り、比較することとした。「発声あり習得」で歌う曲は、文部省唱歌の「海」（楽譜2）とした。「海」を選曲した理由は、表1の5つの点で「校歌」と一致していたからである。

「発声あり習得」は、「発声なし習得」と授業回数、授業での歌唱活動の手順、録音の仕方、記録の取り方（「a取れた音数」と「b棒歌いの児童」）などの条件を揃えて行った。相違点はただ一点、授業を「発声あり」で行ったことのみである。

### (2)就学前の歌唱活動の状況調査

歌唱の音取りが正確である児童とそうでな

調査時期 2022年7月中旬

対象児 つくば市K小学校第2学年児童77名

調査曲曲名 海

拍子 4分の3拍子

調子 へ長調

音域 C4～D5

#### 海



楽譜2 海

表1 「校歌」と「海」の一致点

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が未習である</li> <li>・同程度の調性である</li> <li>・同程度の音域である</li> <li>・陽音階のような進行を含む</li> <li>・同程度の跳躍進行を含む</li> </ul> |
|--|

い児童とでは、就学前（コロナ禍前を含めて）の歌唱活動にどのような差があるのか。それを検証するために、就学前の歌唱活動の状況調査の必要があった。そこで、調査は質問紙（図1、図2）によるアンケート調査で行った。質問紙には、「年中のとき」を問う質問がある。3年生にとっては4年前を質問することになり、回答の信用性が下がることが考えられる。そこで、これまで3年生を含めて行っていた調査であったが、ここから2年生の児童（在籍77名）に絞って調査を進めることとした。内容は次の①、

②である。

① レパートリーの広さ

児童は就学前の教育で十分な歌唱活動を行っていたかについて知るために、一般によく歌われる歌を経験しているか否かに視点をおいた。保育園・幼稚園・こども園で多く歌われている、いわゆる「定番曲」について既習・未習を調査することで、定番曲の既習の多さを調査した(図1)。これは、つまりレパートリーの広さということになる。

調査する楽曲は次の a、b 2つの方法で選曲した23曲(表2)である。

a 第1学年音楽科教科書の年度初めに歌う曲

第1学年の音楽の教科書『しょうがくせいのおんがく1』(教育芸術社)と『おんがくのおくりもの1』(教育出版社)に、入学して間もない4月の時期に歌う曲として、幼稚園や保育園などで多く歌われる定番曲が掲載されている。それら12曲を取り入れた。

b 「幼児のための音楽教育」に掲載される各月の歌

「幼児のための音楽教育」(教育芸術社)には、定番曲が多く掲載されている。また、この曲集には、「月の歌」として、その月に合った定番曲がまとめられている。4月から3月までの11の(8月は含まない)各月の最も前のページに掲載されている曲を取り入れた。ただし、それがaに含まれる場合は、次の曲とした。

質問紙(図1)を通して、a、bについて「初めて歌ったのはどこですか」と質問し、「保育園や幼稚園」、「家」、「小学校」のうち1つに○印を書かせ、歌ったことがない歌には何も書かないように指示した。回答のうち「保育園や幼稚園」と「家」のものを就学以前に既習であったと考え、その値

表2 レパートリーの広さ調査のために既習・未習を質問した曲

番号	曲名	a or b
1	はるがきた	b
2	てをたたきましょう	b
3	とけいのうた	b
4	たなばたさま	b
5	とんぼのめがね	b
6	ありさんのおはなし	b
7	ゆうやけこやけ	b
8	ジングルベル	b
9	おしょうがつ	b
10	まめまき	b
11	うれしいひなまつり	b
12	ちゅうりっぷ	a
13	おつかいありさん	a
14	ちょうちょう	a
15	ぞうさん	a
16	めだかの学校	a
17	こどりの歌	a
18	こいのぼり	a
19	こぶたぬきつねこ	a
20	犬のおまわりさん	a
21	やぎさんゆうびん	a
22	ばすごっこ	a
23	かえるのがっしょう	a

つぎのうたを はじめてうたったのは いつでしたか。表の当てはまるところに○を書きましょう。

2年 組 番 なまえ \_\_\_\_\_

ばんごう	うたのたい名	ようちえんやほいくえんでうたった	入学前に家でうたった	小学校でうたった
1	はるがきた			
2	てをたたきましょう			
3	とけいのうた			
4	たなばたさま			
5	とんぼのめがね			
6	ありさんのおはなし			

図1 レパートリーの広さ調査のための質問紙

2. 次の学年では、歌を歌いましたか。1つえらんで○でかこみましょう。

(1) ねんちゅう

ずっと歌った      歌わないじきもあった      ずっと歌わなかった

(2) ねんちゅう

ずっと歌った      歌わないじきもあった      ずっと歌わなかった

(3) 1年生

ずっと歌った      歌わないじきもあった      ずっと歌わなかった

図2 歌っていたかを問う質問紙

を「レパートリーの広さ」とした。

回答は児童の記憶による。例えば就学前に歌っていたのに、その歌を「小学校で初めて歌った」と記憶しているならば就学前のレパートリーには入らないと考える。本研究では、既習・未習の事実というより既習を記憶しているものをレパートリーと考えることとする。

#### ②歌を「歌っていた」かどうか

児童たちにとって就学前教育の時期は、新型コロナウイルス感染拡大が始まった時期である。保育園などの就学前教育施設では、歌唱活動を停止していたところもあった可能性がある。そこで、児童の就学前の歌唱活動実施状況を知るために、年中、年長、小1それぞれの時期は歌を「歌っていた」かを問うアンケート調査(図2)を行った。

### (3) 児童の歌唱の音高と就学前の歌唱活動の状況との照合

#### ①「取れた音数」と「レパートリーの広さ」の照合

「取れた音数」は、「校歌」と「海」とで8音ずつチェックした、合わせて16音のうち、1回以上取れた音の数である。数が0から16までの児童を9グループに分け、レパートリーの広さとの照合を行った。

#### ②「棒歌い」と「レパートリーの広さ」の照合

「棒歌い」とは、音高操作音域が5度を超えず、旋律の音高をおおまかにも取れていない状態である。「校歌」と「海」のそれぞれで棒歌いになっている児童を特定し記録した。それを、「2曲とも棒歌いが生じなかったグループ」、「1曲のみ棒歌いが生じたグループ」、「2曲とも棒歌いが生じたグループ」というように、棒歌い頻度で3つのグループに分け、レパートリーの広さとの照合を行った。

#### ③「取れた音数」と「歌っていた」の照合

「取れた音数」について①と同様にグルー

プに分けし、(2)②の「歌っていた」の値との照合を行った。

#### ④「棒歌い」と「歌っていた」の照合

「棒歌い」について②と同様にグループ分けし、(2)②の「歌っていた」値との照合を行った。

## 4. 結果と考察

結果と考察は、3(3)「(1)と(2)の照合」についてのみ行う。

### (1)「取れた音数」と「レパートリーの広さ」の照合

「取れた音数」とは「校歌」と「海」の2曲合わせて16音について1回以上取れた音数である。「レパートリーの広さ」とは保育園などで歌われる定番曲23曲のうち、既習であったものの数である。取れた音の数0から16までの児童を9グループに分け、グループ別にレパートリーの広さ平均値をグラフにした(図3)。このグラフからは、取れた音数とレパートリーの広さの間に関係性があるとは言えない。なお、これらグループ間の人数差が大きいため、各グループのレパートリーの広さ調査で回答が得られた人数を表3に示す。

### (2)棒歌いとレパートリーの広さの照合

「棒歌い」とは、音がほとんど取れず、音高操作の幅が5度を超えられない児童である。レ

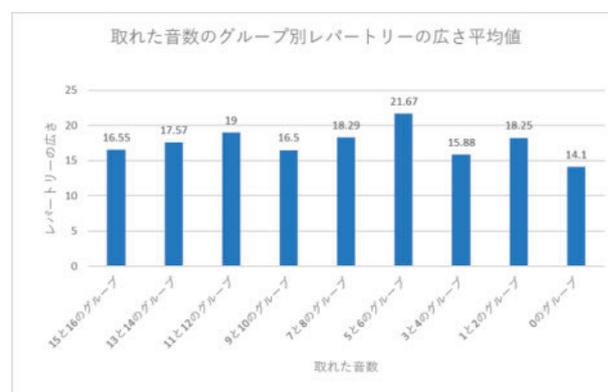


図3 取れた音数のグループ別レパートリーの広さ平均値のグラフ

表3 取れた音数のグループごとの人数

取れた音数のグループの	15と	13と	11と	9と	7と	5と	3と	1と	0
調査に回答した人数	20	7	6	6	7	3	8	4	10

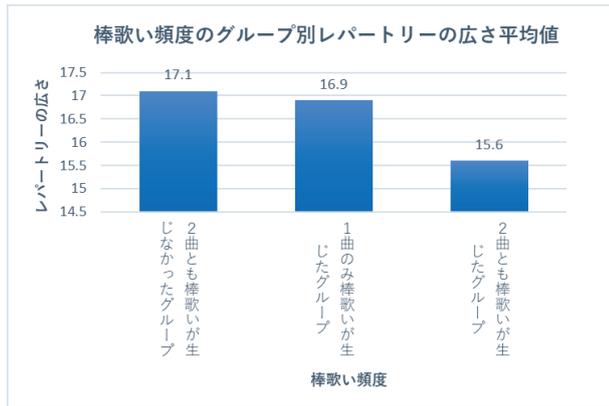


図4 棒歌い頻度のグループ別レパートリーの広さ平均値のグラフ

表4 棒歌い頻度のグループごとの人数

棒歌い頻度	1曲のみ棒歌いが生じた	2曲とも棒歌いが生じた
調査に回答した人数	17	8

パートリーの広さとは、23曲の定番曲のうち何曲を就学前に歌っていたかという数値である。「棒歌い」について、2曲とも棒歌いが生じなかったグループ、1曲のみ棒歌いが生じたグループ、2曲とも棒歌いが生じたグループというように、棒歌い頻度で3つのグループに分け、レパートリーの広さとの照合を行った。棒歌い頻度のグループ別レパートリーの広さ平均値(図4)を示す。

図4のグラフから、棒歌い頻度が高いグルー

表5 取れた音数のグループごとの年中、年長時に「歌っていた」の調査(人数)

取れた音数のグループの	年中			年長		
	歌っていた	期もあつた	歌わなかつた	歌っていた	期もあつた	歌わなかつた
15と16	10/19	9/19	0/19	12/19	7/19	0/19
13と14	4/8	4/8	0/8	3/8	5/8	0/8
11と12	4/7	3/7	0/7	4/7	3/7	0/7
9と10	4/6	2/6	0/6	4/6	1/6	1/6
7と8	4/6	2/6	0/6	4/7	3/7	0/7
5と6	2/3	1/3	0/3	1/3	2/3	0/3
3と4	2/8	5/8	1/8	3/9	6/9	0/0
1と2	0/3	3/3	0/3	2/4	1/4	1/4
0	3/8	5/8	0/8	2/7	5/7	0/7

表6 取れた音数のグループごとの年中、年長時に「歌っていた」の調査(割合)

取れた音数のグループの	年中			年長		
	歌っていた	期もあつた	歌わなかつた	歌っていた	期もあつた	歌わなかつた
15と16	53%	47%	0%	63%	37%	0%
13と14	50%	50%	0%	38%	63%	0%
11と12	57%	43%	0%	57%	43%	0%
9と10	67%	33%	0%	67%	17%	17%
7と8	67%	33%	0%	57%	43%	0%
5と6	67%	33%	0%	33%	67%	0%
3と4	25%	63%	13%	33%	67%	0%
1と2	0%	100%	0%	50%	25%	25%
0	38%	63%	0%	29%	71%	0%

プの方がレパートリーは狭いという傾向をゆるやかに示しているものの、棒歌い頻度とレパートリーの広さに関係性があるとまでは言い切れない結果である。なお、これらグループ間の人数差が大きいため、各グループの「レパートリーの広さ」調査で回答が得られた人数を

表4に示す。

### (3)「取れた音数」と「歌っていた」の照合

取れた音数について(1)と同様に、0から16までの児童を9グループに分け、グループごとに「歌っていた」調査の回答人数(表5)と、回答割合(表6)をまとめた。この表から、下位の児童(取れた音が0から4にかけての3グループ)の「歌っていた」割合が低い傾向にあることがわかる。このことから、第2学年児童が、音高を適切に操作し音を取って歌うことに、就学前の歌唱活動の量がなんらかの影響をしている可能性が示唆される。

表7 棒歌い頻度ごとの「歌っていた」アンケート結果(年中のとき)

棒歌い頻度	回答人数	選択した人数		
		歌っていた	歌わな い時期 もあ った	歌わな かった
2曲とも棒歌いが生じなかったグループ	45	23	21	1
1曲のみ棒歌いが生じたグループ	17	8	9	0
2曲とも棒歌いが生じたグループ	6	2	4	0

表8 棒歌い頻度ごとの「歌っていた」アンケート結果(年長のとき)

棒歌い頻度	回答人数	選択した人数		
		歌っていた	歌わな い時期 もあ った	歌わな かった
2曲とも棒歌いが生じなかったグループ	46	24	21	1
1曲のみ棒歌いが生じたグループ	18	9	9	0
2曲とも棒歌いが生じたグループ	6	2	3	1

また、コロナ禍において歌唱活動が停止されていたことを予想してこの状況調査を行ったのであるが、2年生がコロナの影響を大きく受けたのは年長からであった。それにしても、年中と大きな値の差が見られないことは意外であった。

しかし、下位3グループの「歌っていた」割合が、コロナ禍前であった年中でも値が低いことが気になるところである。

表9 棒歌い頻度ごとの「歌っていた」割合

棒歌い頻度	年中			年長		
	歌っていた	期もあ った	歌わな かつ	歌っていた	期もあ った	歌わな かつ
2曲とも棒歌いが生じなかったグループ	51%	47%	2%	52%	46%	2%
1曲のみ棒歌いが生じたグループ	47%	53%	0%	50%	50%	0%
2曲とも棒歌いが生じたグループ	33%	67%	0%	33%	50%	17%

### (4)「棒歌い」と「歌っていた」の照合

棒歌い頻度を(2)と同様に、3つのグループに分け、グループごとに、「歌っていた」調査の回答人数を年中(表7)と年長(表8)とに分けて表にまとめた。また、「歌っていた」回答の割合を表9にまとめた。

表9を見ると、棒歌いが生じなかったグループは、「歌っていた」値が「歌わなかった時期もあつた」値を(年中、年長を通じて)上まわっているのに対して、2曲とも棒歌いが生じたグループは「歌っていた」割合が「歌わなかった時期もあつた」割合よりもだいぶ低い値となっている。また、1曲のみ棒歌いが生じたグループは、その2つのグループの間を取るような値となっている。これらのことから、棒歌い頻度と、就学前に歌っていた

かどうかには関係性があり、第2学年児童が音高をおおまかに操作し、棒歌いにならぬように歌うことには、就学前の歌唱活動の量がなんらかの影響をしている可能性が考えられる。

### (5)全体の考察

(1)では、「取れた音数」と「レパートリーの広さ」の間に関係性が認められないことを述べた。(2)では、「棒歌い頻度」と「レパートリーの広さ」に関係性があるとは言いきれないことを述べた。(3)では、「取れた音数」と就学前に「歌っていた」値との関係が示され、音高を適切に操作し音を取って歌うことに、就学前の歌唱活動の量がなんらかの影響をしている可能性あることを述べた。(4)では、「棒歌い頻度」と、就学前に「歌っていた」値との関係性が認められ、音高をおおまかに操作し、棒歌いにならぬように歌うことには、就学前の歌唱活動の量がなんらかの影響をしている可能性があることを述べた。

(1)、(2)からは、第2学年の歌唱活動における音高の正確さと、就学前に多くの歌を経験しているか否か（レパートリーの広さ）とは、はっきりとした関係性はないと言える。

(3)、(4)からは、歌唱活動における音高の正確さと、歌唱活動の量は関係性があり、就学前の歌唱活動の量は、第2学年の歌唱の音高操作になんらかの影響をしている可能性があると言える。

また、(3)では、「取れた音数」と「歌っていた」値の照合に関して、年中と年長とで大きな差が見られなかったこと、取れた音数が下位3グループの「歌っていた」割合がコロナ禍前であった年中時でさえも低いことを述べた。このことは、音を取って歌ったり、棒歌いにならぬように歌ったりするスキルは、年中の年に確立したことを意味するのであろうか。または年中以前に確立したことを意味す

るのであろうか。

小長野（2006a）は、「幼児の『歌唱の音高の正確さ』に関する縦断的研究」において、幼児の音高再生能力などについて、4歳児を対象に縦断的に調査した。この研究は「音高再生能力は4歳後半に著しく発達するものと考えられる。」と述べている。その根拠は次のことにある。

小長野は、A幼稚園の4歳児に対して、音高再生能力の調査を年中の9月と3月、年長の9月と3月の合計4回行った。その結果、年中の9月から3月にかけての音高再生能力の伸びが顕著に大きいという結果になった

(図5)。つまり、年中の年の後半に、幼児たちの音高再生能力の伸長が大きく表れ、それ以降は大きな伸長は認められなかったというのである。(3)の「取れた音数」が下位の児童や、(4)の棒歌いしがちな児童は、年中の年に「歌っていた」値が低かった。このことは、音高再生能力が著しく成長する年中の年（の後半）に、歌う活動が少なかったために、成長の時期を逃してしまったことが考えられ、小長野の研究の裏付けである可能性がある。

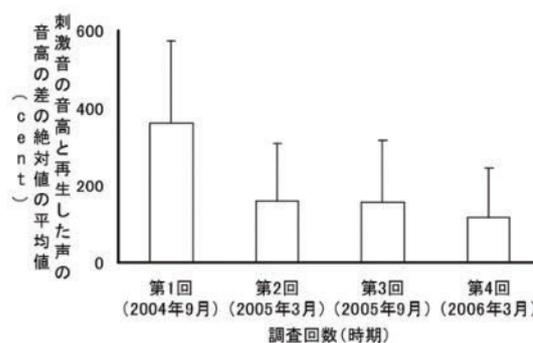


図5 音高再生能力調査の刺激音の音高と再生した声の音高の差の絶対値の平均値の推移

さらにこの研究は、「幼児期は『歌唱の音高の正確さ』の発展途上の時期である。」という

ことと、「音高再生能力は4歳後半に著しく発達するが、その発達は、主に音高再生能力水準2、3という中程度の水準への発達である。」ことを述べている。「中程度の水準へ」とはどういうことなのか。

小長野はこの研究で歌唱の音高の正確さを検討するために、Welch (2000) の音高再生能力の発達過程のモデル (表 10) をもとにした。このモデルの水準に、縦断的に調査した幼児の歌唱における音高再生能力の結果を照らし合わせたのである (図 6)。

表 10 Welch (2000) が示した音高再生能力の発達過程のモデル (Welch, 2000 をもとに小長野が作成したもの)

水準1	非常に狭い音域で歌唱している。
水準2	声の音高を変化させることができることに気づく。歌唱したメロディーが、対象となるメロディーの輪郭に近づき始める。
水準3	メロディーの形や音程はおおむね正確であるが、歌唱している途中で転調する。
水準4	メロディーや音高の顕著な間違いはない。

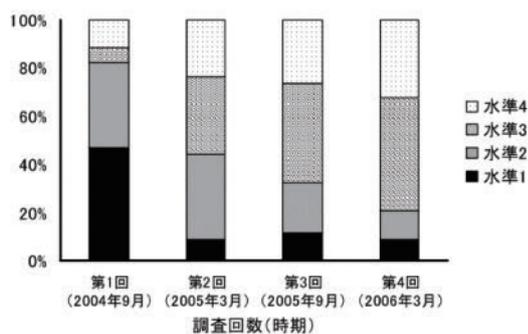


図 6 各回の調査の音高再生能力水準別の幼児の比率

図 6 を見ると、水準 1 の割合の減少については、音高再生能力調査と同様に年中の 9 月から 3 月にかけて成長 (減少) が大きい。し

かし、増えてほしいところの水準 4 の割合は、ゆるやかに増えてきているものの、最終調査の年長 3 月でも 3 割強である。

このことが、幼児の「音高再生能力は 4 歳後半に著しく発達するが、その発達は、主に音高再生能力水準 2、3 という中程度の水準への発達である。」根拠となった。

Welch の「音高再生能力の発達過程のモデル」とのすり合わせは行っていないが、本研究のこれにあたるものが、「取れた音数」や「棒歌い頻度」になる。取れた音数と「歌っていた」値とを照合した表 (表 6) では、取れた音数別のグループ 9 つのうち、下位 3 グループの値が低い (年中) ことは明確であるが、それ以外 6 グループは、ほぼ横並びである。また、棒歌い頻度ごとの「歌っていた」割合 (表 9) は、3 グループ中、上位 2 グループと下位 1 グループとの差がはっきりしている。これらの結果は、小長野の Welch の「水準」をもとにした研究の裏づけである可能性がある。

## 5. 今後の課題

### (1) 指導者への調査

本研究の就学前の歌唱活動の状況調査は、質問紙による児童へのアンケートで行った。児童は、筆者の立ち会いのもとアンケートの記入を行い、回答のしかたなどの質問にも応じたため、回答が大きく信用に欠けるものではないと思われる。しかし、就学前の歌唱活動の状況を正確に調査するためには、保育士など、就学前の歌唱活動の指導者への調査を行うことが望ましい。児童の出身幼稚園、保育園、認定こども園への協力を得て、情報の連携と同時に就学前の歌唱活動を指導する大人への聞き取りをすることが望まれる。また、可能ならば、保護者など家庭への聞き取り調査も行いたい。

### (2) 歌唱指導の見直し

本研究の見解を今後の歌唱指導に活かして

いくことが重要である。音高を的確に歌うことが不得手な児童は、その要因が発達過程や幼児教育の過程にあることを踏まえ、計画的に指導していくことが必要であると考えられる。

小長野はまた、「児童の『歌唱の音高の正確さ』に関する横断的研究」(小長野, 2006)の中で、「音高再生能力は第2学年で著しく発達すると考えられる。」や、「音高弁別能力は第2, 3学年で著しく発達すると考えられる。」と述べている。小学校においても音高に関わる歌唱指導が重要であることは疑う余地がない。

### (3) 他の先行研究との比較

Welch (2000) の音高再生能力の発達過程のモデル(表10)が、本研究の「取れた音数」や「棒歌い」とどのような関係にあるのかは重要な点であると考えられる。これについて検討する必要がある。また、本研究は飯泉(2022)の先行研究を受けて始まり、小長野(2006a)の先行研究を受けて考察を行ったが、歌唱の音高に関する研究や保幼小連携の研究は他にも多数行われている。それら多くの研究と今回の結果を照らし合わせるなどし、多角的に捉えていくことが重要であると考えられる。

### (4) 就学前教育施設との連携

もとより、本研究の目的は、歌唱活動の保幼小連携である。児童の出身の幼稚園、保育園、認定こども園など、就学前教育を施す施設との連携が重要である。研修会などの開催を提案するなど、連携を具体的な行動にし、今回の研究の成果や、先行研究などの情報を園と共有していくことが必要である。就学前教育施設も、それを望んでいることが推察される。

### (5) 就学前の模倣の活動の調査

本研究は、歌唱の音高についての研究である。歌唱の音高には、音高再生能力や、音高弁別能力が関わっていることがわかった。であれば、「音まね遊び」や「声まね遊び」などで育まれる声で模倣する能力が、歌唱の音高に影響する

可能性が考えられる。音まね遊びなどの就学前の模倣の活動について、就学前教育施設や家庭における状況を調査することも、この研究に有効であると考えられる。

### 参 考 文 献

- 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(2010). 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)
- 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(2010). 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)のポイント
- 文部省唱歌(2017).幼稚園教育要領
- 厚生労働省(2018).保育所保育指針解説
- 内閣府、文部科学省、厚生労働省(2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- 飯泉正人(2022).コロナ禍における歌唱活動の一考察～聴取と身体運動のみによる「発声なし」歌唱活動と「発声あり」歌唱活動の実践報告、日本音楽教育学会第53回大会:97
- G.Welch,小川容子訳(2006).子どものヴォーカル・ピッチマッチ能力の発達に関する研究動向(英国歌唱プログラム(2007-2011)に関して発表した報告書と歌唱発達に関する著書の抜粋)
- 小長野隆太(2006a). 幼児の「歌唱の音高の正確さ」に関する縦断的研究、広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第55号:451-460
- 小長野隆太(2006b). 児童の「歌唱の音高の正確さ」に関する横断的研究、日本教科教育学会誌第29巻第3号:77-86
- 北村柚葵, 北洋輔, 奥村安寿子, 稲垣真澄, 奥住秀之, 石川裕司(2019).小児期における音高弁別能力の発達の变化、音楽知覚認知研究 Vol. 25, No. 1, 3